

# 居すわるか 数打ってあてるか

— 雑草が選んだ二つの生き方 —

校庭に生える雑草。足でふんでも手で抜きとつても、しばらくするとまた元気に生えてきますね。ちょっと不思議！何か特別な仕組みをもっているにちがいありません。

校庭という環境は、人にふまれたりいつ抜かれるかも予想できない、雑草にとっては「あぶない場所」。そんな環境で生きぬくための雑草の作戦が、二つあります。

一つはオオバコやタンポポのように、じょうぶな葉を地面に平たく広げて踏まれることに耐え、さらに、がっしりとした根をはって葉が刈られてもふたたび根から復活するという方法。これが「居すわり型」。この作戦は根に力をたくわえることが大切なため、同じ場所で2年3年と長く生長しつづけます（多年草）。

もう一つは、一年草の雑草による「数打ってあてる型」です。一年草とは、種から生長して実をつけて枯れるまでを一年以内にすませてしまう草のこと。校庭にあるケイヌビエ、メヒシバなどが一年草で、わずか1か月から4か月ぐらいで一生涯を終えてしまいます。ちなみに、田んぼで作られるイネも一年草です。

メヒシバを富山市内の学校で集めてみると、小さくても種（正しくは果実）をつけているものから大きく生長してたくさんの種をつけているものまで、さまざまでした（図）。小さな株は、いつやってくるか分からない草刈りの前に、少しでもいいから早く種をつけてしまう役割をになっているもの。大きな株は、じゅうぶん生長してどっさり種をつける役割をになっているものです。そして、それらの発芽する時期がばらばらで、次から次へと芽を出してくるのがとくちょうです。

性質がふぞろいな種を数多く作ってばらまいておいて、どれかが当たればもうけもの。明日どうなるかわからないような不安定な環境で子孫を残していくには、この「数打ってあてる型」作戦もかなり有効なようです。



校庭から集めたメヒシバ（一年草）：性質が少しずつことなる種から育ってきたものたち。

（2008年8月太田道人）